

グローラシュタカム

アーディ・シヤンカラーチャーリヤ作と伝わる賛歌

第1節

शरीरं सुरूपं तथा वा कलत्रं
यशश्चारु चित्रं धनं मेरुतुल्यम्।
मनश्चेन्न लग्नं गुरोरङ्घ्रिपद्मे
ततः किं ततः किं ततः किं ततः किम्॥

*śarīraṁ surūpaṁ tathā vā kalatraṁ
yaśaś cāru citraṁ dhanaṁ meru-tulyam |
manaś cen na lagnaṁ guror aṅghri-padme
tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kim //*

メール山(純金でできていると言われる)と同等の名声、愛、卓越性、
そして富を持つかもしれないが、
もしそのマインドがグルの蓮花(れんか)の足に属していないのなら、
それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、
それがどうしたというのか。

第2節

कलत्रं धनं पुत्रपौत्रादि सर्वं
गृहं बान्धवाः सर्वमेतद्धि जातम्।
मनश्चेन्न लग्नं गुरोरङ्घ्रिपद्मे
ततः किं ततः किं ततः किं ततः किम्॥

*kalatram dhanam putra-pautrādi sarvam
grham bāndhavāḥ sarvam etad dhi jātam |
manaś cen na lagnaṁ guror aṅghri-padme
tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kim ||*

妻、富、息子、孫、家、人間関係——
これらすべてを持つかもしれないが、
もしそのマインドがグルの蓮花の足に属していないのなら、
それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、
それがどうしたというのか。

第3節

षडङ्गादिवेदो मुखे शास्त्रविद्या
कवित्वादि गद्यं सुपद्यं करोति।
मनश्चेन्न लग्नं गुरोरङ्घ्रिपद्मे
ततः किं ततः किं ततः किं ततः किम्॥

*ṣaḍ-aṅgādi-vedo mukhe śāstra-vidyā
kavitvādi gadyam supadyam karoti |
manaś cen na lagnaṁ guror aṅghri-padme
tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kim ||*

ヴェーダとその六つの付属的知識体系、
そして教典の知識が口の端に上るかもしれないし、
文学的才能を持ち、良い散文や詩を作るかもしれないが、
もしそのマインドがグルの蓮花の足に属していないのなら、
それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、
それがどうしたというのか。

第4節

विदेशेषु मान्यः स्वदेशेषु धन्यः
सदाचारवृत्तेषु मतो न चान्यः।
मनश्चेन्न लग्नं गुरोरङ्घ्रिपद्मे
ततः किं ततः किं ततः किं ततः किम्॥

*videśeṣu mānyaḥ svadeśeṣu dhanyaḥ
sad-ācāra-vṛtteṣu matto na cānyaḥ |
manaś cen na lagnaṁ guror aṅghri-padme
tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kim //*

「私は他国では尊敬され、自国では裕福であり、善行で私に勝る者はいない」と自慢をするかもしれないが、もしそのマインドがグルの蓮花の足に属していないのなら、それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、それがどうしたというのか。

第5節

क्षमामण्डले भूपभूपालवृन्दैः
सदा सेवितं यस्य पादारविन्दम्।
मनश्चेन्न लग्नं गुरोरङ्घ्रिपद्मे
ततः किं ततः किं ततः किं ततः किम्॥

*kṣamā-maṇḍale bhūpa-bhūpāla-vṛndaiḥ
sadā-sevitam̐ yasya pādāravindam̐ |
manaś cen na lagnaṁ guror aṅghri-padme
tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kim̐ ||*

世界中の皇帝や王から
常に敬意を表されるかもしれないが、
もしそのマインドがグルの蓮花の足に属していないのなら、
それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、
それがどうしたというのか。

第6節

यशो मे गतं दिक्षु दानप्रतापात्
जगद्वस्तु सर्वं करे मत्प्रसादात्।
मनश्चेन्न लग्नं गुरोरङ्घ्रिपद्मे
ततः किं ततः किं ततः किं ततः किम्॥

*yaśo me gataṁ dikṣu dāna-pratāpāt
jagad-vastu sarvaṁ kare mat-prasādāt |
manaś cen na lagnaṁ guror aṅghri-padme
tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kim̐ ||*

「私の名声は、私の寛大さと栄光の美德であらゆる場所に広がっている、
世界中のすべての富は私の恵みから私の手の中にある」
と自慢をするかもしれないが、
もしそのマインドがグルの蓮花の足に属していないのなら、
それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、
それがどうしたというのか。

第7節

न भोगे न योगे न वा वाजिराजौ
न कान्तामुखे नैव वित्तेषु चित्तम्।
मनश्चेन्न लग्नं गुरोरङ्घ्रिपद्मे
ततः किं ततः किं ततः किं ततः किम्॥

*na bhoge na yoge na vā vājirājau
na kāntā-mukhe naiva vitteṣu cittam /
manaś cen na lagnaṁ guror aṅghri-padme
tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kim //*

楽しみや、ヨーガ、
馬のような物質的な財産、
愛する人の顔、富などについて考えないとしても、
それでも、もしそのマインドがグルの蓮花の足に属していないのなら、
それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、
それがどうしたというのか。

第8節

अरण्ये न वा स्वस्य गेहे न कार्ये
न देहे मनो वर्तते मे त्वनर्घ्ये।
मनश्चेन्न लग्नं गुरोरङ्घ्रिपद्मे
ततः किं ततः किं ततः किं ततः किम्॥

*araṇye na vā svasya gehe na kārye
na dehe mano vartate me tvanarghye |
manaś cen na lagnaṁ guror aṅghri-padme
tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kim //*

たとえ私のマインドが、森の中で生活すること、
所帯主であること、業績、身体、
とても貴重な物などに執着していないとしても、
それでも、もし私のマインドがグルの蓮花の足に属していないのなら、
それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、
それがどうしたというのか。

第9節

गुरोरष्टकं यः पठेत् पुण्यदेही
यतिर्भूपतिर्ब्रह्मचारी च गेही।
लभेद्वाञ्छितार्थं पदं ब्रह्मसंज्ञम्
गुरोरुक्तवाक्ये मनो यस्य लग्नम्॥

मनश्चेन्न लग्नं गुरोरङ्घ्रिपद्मे
ततः किं ततः किं ततः किं ततः किम्॥

*guror aṣṭakaṁ yaḥ paṭhet puṇya-dehī
yatir bhū-patir brahma-cārī ca gehī |
labhed vāñchitārthaṁ padaṁ brahma-saṁjñam
guroruktavākye mano yasya lagnaṁ //*

*manaś cen na lagnaṁ guror aṅghri-padme
tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kiṁ tataḥ kim //*

グルについてのこれら八つの詩節を朗唱し、
グルの言葉にそのマインドを凝らす徳の高い人は
——彼が苦行者であろうと、王や生徒、または所帯主であろうと——
願っていた(解放の)目標、
すなわちブラフマンと呼ばれる境地を達成するだろう。

もしそのマインドがグルの蓮花の足に属していないのなら、
それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、それがどうしたというのか、
それがどうしたというのか。

「グローラシュタカム」または「グルについての 8 詩節」は、インドで最も有名な哲学者で詩聖の一人であるアーディ・シャンカラ・チャーリヤ(西暦 788—820 年)によるとされる、サンスクリット語の詩です。言い伝えでは、彼は個々の魂(アートマン)と至高なる者(ブラフマン)は一つであると教えるアドヴァイタ・ヴェーダーンタの教義を説きながら、インド中を徒歩で旅しました。

「グローラシュタカム」の詩節で、美しさ、富、名声、精神的な学び、徳の高い行い、ヨーガの達成でさえも、マインドがグルへの献身に浸っていなければ何の意味もないと、シャンカラ・チャーリヤは指摘しています。

